

等位接続に現れる形容詞・形容動詞のテ形について

内丸 裕佳子

キーワード：テ形，時制，定形，等位接続形式，等位接続構造

1. はじめに

下記に示す例文(1)はいわゆる形容詞・形容動詞¹を二つ続けて等位接続したものである。

- (1) a. そのトマトは赤くて、おいしい
b. 花子は朗らかで、穏やかだ

(1a)では「赤い」という形容詞と「おいしい」という形容詞を等位接続するために、「赤い」が「赤くて」になる。(1b)では「朗らかだ」という形容動詞と「穏やかだ」という形容動詞を等位接続するために、「朗らかだ」が「朗らかで」になる。(1a)の「赤くて」と(1b)の「朗らかで」はテ形と呼ばれており、先行研究でこれらに現れるテそのものは、ある要素をつなぐ接続形式だと指摘されている。

さて、(1a)と(1b)に現れるテが単なる接続形式ならば、なぜ(2)－(5)の例文でテ形による等位接続が許されないのだろうか。

- (2) a. 花子はごぼうを薄く切った & 花子はごぼうを細く切った
b. *花子はごぼうを薄くて、細く切った
c. 花子はごぼうを薄く、細く切った

¹ 本稿では(1a)の下線部の語彙を形容詞と呼び、(1b)の下線部の語彙を形容動詞と呼ぶ。ここで「いわゆる形容詞・形容動詞」と呼ぶのは、先行研究において形容動詞がさまざまな名称で呼ばれてきたこと、形容動詞を形容詞とは別の独立した一つの品詞として認めるかが議論されてきたことによる。

形容動詞(あるいは名詞的形容詞、形容名詞)を独立した品詞として認める立場に吉澤(1932)、橋本(1935)、Kageyama(1982)、寺村(1982)、Miyagawa(1987)、影山(1993)、Uehara(1998)がある。

形容動詞を一つの品詞として認めない立場に山田(1908)、三尾(1942)、時枝(1950)、水谷(1951、1952)、三上(1955)、山崎(1958)、塚原(1970)、柏谷(1973)がある。三尾(1942)、三上(1955)は、形容動詞は形容詞であると主張する。山田(1908)、時枝(1950)、水谷(1951、1952)、山崎(1958)、塚原(1970)、柏谷(1973)は、形容動詞は語幹と指定の助動詞「だ」の二語から成立し、名詞+指定の助動詞「だ」との共通性から形容動詞の語幹は名詞であると主張する。形容動詞を名詞と同一に扱う立場では、統語的な分析よりも形容動詞の語幹と名詞との共通点・相違点に関する観念論的な議論が多い。

本稿では形容詞・形容動詞に関する品詞論は展開しない。しかし、文法体系におけるレキシコンの負担の軽減を目指すなら、Nishiyama(1998、1999a)、Baker(2003)のように統語的には同一の語彙範疇であり、統語構造も同一で、両者の形態の違いは統語構造決定後に現れると考えるのが望ましいだろう。

- (3) a. 花子は歌を明るく歌った & 花子は歌を楽しく歌った
 b. *花子は歌を明るくて, 楽しく歌った
 c. 花子は歌を明るく, 楽しく歌った
- (4) a. 花子は口を真っ赤に塗った & 花子は口を濃く塗った
 b. *花子は口を真っ赤で, 濃く塗った
 c. 花子は口を真っ赤に, 濃く塗った
- (5) a. 花子は歌を上手に歌った & 花子は歌を優雅に歌った
 b. *花子は歌を上手で, 優雅に歌った
 c. 花子は歌を上手に, 優雅に歌った

(2) - (5) の下線部は、動詞句を修飾する連用修飾句である。(2) (3) は形容詞を用いた例であり、(4) (5) は形容動詞を用いた例である。(2) は形容詞を用いた結果構文で、(3) は形容詞を用いた様態構文である。(4) は形容動詞を用いた結果構文で、(5) は形容動詞を用いた様態構文である。動作の様態や結果状態を表す形容詞・形容動詞を等位接続する場合、テ形を用いた文は(2) - (5) の(b)に示すように不適格になる。テ形を構築するテそれ自体が接続形式なら、(2) - (5) の(b)は適格なはずである。なぜこれらは不適格になるのだろうか。本稿では、形容詞・形容動詞におけるテ形の文法環境を考察し、形容詞・形容動詞のテ形は時制を伴う等位接続構造から具現化されることを主張する。

2. 一次述部に現れる形容詞・形容動詞のテ形

まず、2節では(6)の下線部の述部に現れる形容詞・形容動詞のテ形にどのような特徴があるかを考察する。

- (6) a. そのトマトは赤くて, おいしい
 b. 花子は朗らかで, 穏やかだ

(6) は形容詞・形容動詞を一次述部として等位接続した例である。この等位接続で興味深いのは、(7) - (12) のように時の副詞を用いた文を等位接続した場合、非過去時制でも過去時制でもテ形をとる点である。

- (7) a. 花子は今日おとなしい & 花子は今日優しい
 b. 花子は今日おとなしくて, 優しい
- (8) a. 花子は今日朗らかだ & 花子は今日穏やかだ

- b. 花子は今日朗らかで, 穏やかだ
- (9) a. 東京の月は昨日赤かった & 東京の月は昨日丸かった
b. 東京の月は昨日赤くて, 丸かった
- (10) a. 仕事は昨日楽だった & 仕事は昨日暇だった
b. 仕事は昨日楽で, 暇だった
- (11) a. 東京の天気は昨日悪かった & 東京の天気は今日いい
b. 東京の天気は昨日悪くて, 今日いい
c. 東京の天気は今日よくて, 昨日悪かった
- (12) a. あの部屋は昨日にぎやかだった & あの部屋は今日静かだ
b. あの部屋は昨日にぎやかで, 今日静かだ
c. あの部屋は今日静かで, 昨日にぎやかだった

(7) (8) は時の副詞「今日」を使い, 非過去時制の形容詞あるいは形容動詞を等位接続したものである. (7) では「おとなしい」が「おとなしくて」になり, (8) では「朗らかだ」が「朗らかで」になる. (9) (10) は時の副詞「昨日」を使い, 過去時制の形容詞あるいは形容動詞を等位接続したものである. (9) では「赤かった」が「赤くて」になり, (10) では「楽だった」が「楽で」になる. (11) (12) は, 「東京の天気」あるいは「あの部屋」の属性を表す過去時制の文と非過去時制の文を等位接続したものである. (11) (12) は過去時制の形容詞文・形容動詞文を前節にしても, 非過去時制の形容詞文・形容動詞文を前節にしてもテ形になることを示す. (7) - (12) において, 非過去時制を持つ文も過去時制を持つ文も等位接続されるとすべてテ形になることから, これらのテ形は時制を伴った等位接続形式だといえる.

では, 次にこれらのテ形が時制を伴った等位接続形式だといえるのか, 三原 (1997) をもとに検証したい. 三原 (1997) は連用形述語について, 空所化の現象や節の基準時点を根拠に, 定形の時制指定があると主張する. (13) は三原 (1997) の空所化の例である.

- (13) a. *大阪外大では, 昨年ハンガリー語学科が[新設され], 来年は, さらに充実した教育体制を確立するために, トルコ語学科が新設される (三原 1997 : 27 (7a))
b. 主人は今日は金沢に[おり], 明日はたぶん富山におります (三原 1997 : 31 (21a))

(13a)において、[]を空所化した文は不適格になる。この理由について、三原(1997)は(13a)の前節と後節の時制指定が異なり、厳密同一性条件に違反するためだと説明する。

(13a)の場合、前節の連用形「新設され」には過去の時副詞「昨年」を含む過去の時制指定があり、後節には非過去の時制指定がある。前節と後節の時制指定が異なるため、厳密同一性条件の違反から空所化が許されない。

(13b)は適格である。「今日」と「明日」では時指定は異なるが、時制という観点では非過去時制として共通している。(13b)の前節の連用形「おり」は、「今日」という非過去時制を持ち、後節は「明日」という非過去時制を持つ。前節と後節の時制指定が一致するため、厳密同一性条件に従って空所化が許される。

前節と後節の時制指定が同じなら空所化は可能で、異なるなら空所化は許されないのである。つまり、連用形節に時制指定があると考えなければ、(13a)(13b)の空所化の適格性・不適格性が説明できないのである。

本稿で考察するテ形節は等位接続文である。この等位接続文に現れるテ形節が時制指定を持つ定形節であるなら、前節と後節に異なる時制値を与え、前節のテ形節を空所化させると、厳密同一性条件の違反から(13a)と同様の不適格な結果が得られることが予測される。(14)(15)は、(13a)の連用形節の空所化テストをテ形節に適用した例である。(14)は形容詞を用いた例であり、(15)は形容動詞を用いた例である。

- (14) a. 大阪は昨日暑くて、東京は明日暑い
b. *大阪は昨日[暑くて]、東京は明日暑い

- (15) a. この辺り一帯で工事が続いている。昨日はあそこが危険で、明日はここが危険だ
b. *この辺り一帯で工事が続いている。昨日はあそこが[危険で]、明日はここが危険だ

(14a)で過去時制を伴う前節の「暑くて」は、(14b)のように空所化が許されない。同様に、(15a)で過去時制を伴う前節の「危険で」は、(15b)のように空所化が許されない。

(14b)(15b)から、(14a)(15a)の形容詞・形容動詞のテ形節は、時制指定を伴う定形の等位接続形式だといえる。

三原(1997)はさらに、相対時制・絶対時制と非定形節・定形節との対応について言及している。時制を持たない非定形節は主節時を基準とする相対時制をとり、時制を持つ定形節は発話時を基準とする絶対時制をとると述べている。(16)は、前節と後節の時制解釈が発話時を基準にしていることを示す例である。

- (16) a. その仏像は一昨日は居間にあり、昨日は客間にあった

b. その仏像は昨日は客間にあり、一昨日は居間にあった (三原 1997: 29 (12))

(16a) (16b) の例を見ると、前節の時制解釈は後節の時点を基準とした相対時制でないことがわかる。(16) の前節の時制解釈は発話時を基準にしたものであり、前節は発話時から見た過去の事態の叙述である。(16) が絶対時制解釈をとることから、三原 (1997) は連用形節が定形節であると主張する。

(17) (18) は形容詞・形容動詞のテ形節の時制解釈を見たものである。

- (17) a. ポチは昨日ともうるさくて、今日とも静かだ
b. ポチは今日とも静かで、昨日ともうるさかった

- (18) a. 昨日の授業では花子が積極的で、今日の授業では太郎が積極的だ
b. 今日の授業では太郎が積極的で、昨日の授業では花子が積極的だった

(17) (18) で前節と後節を入れ替えても、その時制解釈は変わらない。前節のテ形節は発話時を基準とする絶対時制である。つまり、絶対時制をとることは、形容詞・形容動詞のテ形節が時制指定を伴う定形の等位接続形式であることを示すことになる。

(13) - (15) の空所化のテストでさらにわかるのは、三原 (1997: 25-31) が指摘するように、これらの節が (19) のような拘束テンス構造ではなく、(20) のような前節と後節がそれぞれ独立した時制指定構造を持つということである。

- (19) a. [私は喫茶店に入り、コーヒーを注文し] タ
b. [そのトマトは赤くて、おいし] イ
c. [花子は朗らかで、穏やか] ダ

- (20) a. [TP 私は喫茶店に入り], [TP 私はコーヒーを注文した]
b. [TP そのトマトは赤くて], [TP そのトマトはおいしい]
c. [TP 花子は朗らかで], [TP 花子は穏やかだ]

もし、(19) のように拘束テンス構造を仮定するならば、(13) - (15) の連用形節あるいはテ形節は時制指定を持たない非定形節になる。前節にも後節にも時制指定がないならば、(13a) (14b) (15b) は厳密同一性条件に従い、適格になるはずである。しかし、これらが不適格になるということは、前節と後節は (19) のような拘束テンス構造ではなく、(20) のようなそれぞれ独立した時制指定構造だということになる。

「そのトマトは赤くて、おいしい」「花子は朗らかで、穏やかだ」といった形容詞・形容動詞のテ形を伴う等位接続文が (20) のような構造をとることは、前節と後節にそれぞれ

異なる主格主語が生起できることから支持される。(21) は形容詞を用いて、前節と後節に異なる主格主語を生起させた例である。(22) は形容動詞を用いて、前節と後節に異なる主格主語を生起させた例である。

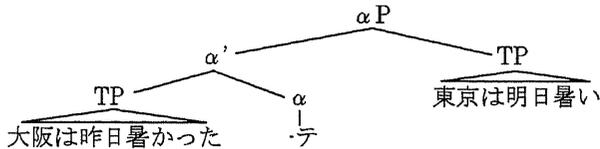
- (21) a. このトマトが赤くて、あのトマトが青い
 b. 大阪が昨日暑くて、東京が明日暑い

- (22) a. 花子が朗らかで、太郎が陽気だ
 b. この辺り一帯で工事が続いている。あそこが昨日危険で、ここが明日危険だ

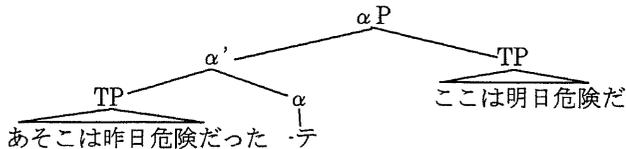
(21) (22) のように、前節と後節にそれぞれ異なる主格主語が生起することは、時制辞が主格を付与すると考えるなら (Takezawa (1987), 竹沢 (1998)), 前節のテ形節は TP 位置で独立した節を構築し、後節も TP 位置で独立した節を構築していることになる。つまり、(21) (22) の主格付与の例からも、形容詞・形容動詞のテ形節が時制指定を持つ定形節として等位接続されていることが確かめられるのである。

以上の結果をまとめると、形容詞・形容動詞のテ形節について次のような統語構造が得られる。

- (23) a. 一次述部における形容詞のテ形節の統語構造



- b. 一次述部における形容動詞のテ形節の統語構造



(14a) 「大阪は昨日暑くて、東京は明日暑い」の場合、(23a) の統語構造をとる。(15a) 「あそこは昨日危険で、ここは明日危険だ」の場合、(23b) の統語構造をとる。 α を主要部とする αP は等位接続を示したものである。(23a) 「大阪は昨日暑かった」の「暑かった」は等位接続により、「暑くて」になる。(23b) 「あそこは昨日危険だった」の「危険だった」は等位接続により、「危険で」になる。形容詞・形容動詞の形態「-い」「-かった」「-だ」「-だった」が「-くて」「-で」というテ形になるのは、分散形態論 (Distributed

Morphology, Halle and Marantz (1993)) に従い、統語構造が決定された後の操作による
とみなす (5 節で詳述する)。

以上、2 節では、一次述部に現れる形容詞・形容動詞のテ形節が時制指定を伴う定形の等
位接続形式であり、TP 位置で (23) のような統語構造をとることを示した。

3. 形容詞・形容動詞のテ形が現れない文法環境

3 節では、形容詞・形容動詞のテ形が現れない文法環境を考察することにより、形容詞・
形容動詞のテ形節が時制を伴う定形の等位構造を構築することを確認する。

(24) (25) は、形容詞の形態「-く」、形容動詞の形態「-に」が時制を持たない非定
形構造をとることを示す例である。

- (24) a. 家が大きい
b. 家が大きくて、新しい
c. 太郎が [家*が / を大きく] した
d. *太郎が [家が大きく、新しく] した²
e. *太郎が [家が大きくて、新しく] した
f. 太郎が [家を大きく、新しく] した
g. *太郎が [家を大きくて、新しく] した

(24c) - (24g) は、(24a) (24b) における下線部の形容詞述部を動詞「する」の補文
にした例である。

(24c) (24d) の「家」は補文の主語だが、そこに形容詞の形態「-く」が要求される時、
主格ガは付与されない。「家が大きい」が動詞「する」の補文になり、「大きい」が「大き
く」になると、補文の主語は「家が」は不適格で、対格が付与された「家を」が適格にな
る。主格ガは時制辞によって付与される (Takezawa (1987), 竹沢 (1998)). (24c) の補
文の主語に対格が現れるということは、「大きく」が非時制形式であることを示す。

これと同様に動詞「する」の直前に「新しく」という非時制形式が生起する (24d) (24e)
を見ると、これらは「新しく」が非時制形式のため、補文の主語に主格ガが与えられず
不適格になる。

興味深いのは (24f) (24g) の対比である。これらには動詞「する」の直前に「新しく」
という非時制形式があり、補文の主語には対格ヲが付与されている。(24f) は適格で、
(24g) は不適格である。(24f) と (24g) を比べると、不適格性に関与しているのは「大
きく」と「大きくて」の違いである。(24c) で「家を大きく」が適格になるのは、「大きく」

² ここで要求している解釈は「[TP 家が大きい]&[TP 太郎が家を新しくした]」ではない。(24e) (25e) も同
様である。「[TP 家が大きい]&[TP 太郎が家を新しくした]」のような等位構造の場合、原因・理由の解釈が
現れる。

が時制辞を持たず、主語に対格が付与されるからである。それと同様に、(24f)の「家を大きく、新しく」の適格性も、「大きく、新しく」が時制辞をもたないからだと説明できる。

(24f)と(24g)の違いは「て」の有無である。したがって、(24g)の不適格性は、「大きくて」の「て」の部分が関与しているといえる。(24f)では「大きく、新しく」が非時制形式であるため、補文の主語は「家を」になる。(24g)の「大きくて」は時制形式であり、「新しく」は非時制形式であるため、補文の主語に適切な格が与えられず不適格になる。

(24g)は補文の主語に対格を与えた例である。補文の主語に主格を与えても、(24e)のように不適格になる。これは「大きくて」が時制形式、「新しく」が非時制形式で、適切な格が与えられないからである。(24a)－(24g)の例から、形容詞のテ形が時制を伴う定形の等位接続形式であることが確認できる。

次に、形容動詞の例を見る。形容動詞のテ形も、形容詞のテ形と同じ結果が得られる。

- (25) a. 家がきれいだ
b. 家がきれいで、立派だ
c. 太郎が【家*が／をきれいに】した
d. *太郎が【家がきれいに、立派に】した
e. *太郎が【家がきれいで、立派に】した
f. 太郎が【家をきれいに、立派に】した
g. *太郎が【家をきれいで、立派に】した

(25c)－(25g)は、(25a)(25b)における下線部の形容動詞述部を動詞「する」の補文にした例である。形容動詞でも(24)の形容詞の例と同様の結果が得られる。異なるのは、形容詞で「ーく」だった部分が形容動詞の場合「ーに」になる点である。

(25c)の「家」は補文の主語だが、そこに形容動詞の形態「ーに」が要求される時、主格は付与されない。「家がきれいだ」が動詞「する」の補文になり、「きれいだ」が「きれいに」になると、補文の主語は「家が」ではなく、対格が付与され「家を」になる。(25c)の補文「家をきれいに」の「きれいに」は、(24)と同様に考えると非時制形式だといえる。

(25d)では「きれいに」も「立派に」も非時制形式のため、補文の主語が主格でマークできず不適格になる。補文の主語は(25f)のように対格でマークされなければならない。

(25e)(25g)を見ると、これらには動詞「する」の直前に「立派に」という非時制形式があるが、この「立派に」と等位接続する形式が形容動詞のテ形「きれいで」だと、補文の主語に主格を与えても対格を与えても不適格になる。補文の述語が「きれいで、立派に」の場合、「きれいで」は時制形式であり、「立派に」は非時制形式であるため、補文の主語に適切な格が与えられず不適格になるといえる。

(25a)－(25g)の例からも、形容動詞のテ形が時制を伴う定形の等位接続形式であると確認できる。

以上、3節では、動詞「する」が要求する補文述部の時制辞の有無によってその主語の格が決まることを根拠に、動詞「する」の補文内の述部を等位接続し、その適格性の判断から形容詞・形容動詞のテ形が時制辞を含む定形の等位接続形式であることを確認した。

4. 結果構文・様態構文でテ形による等位接続が許されない理由

動作の様態や結果状態を表す形容詞・形容動詞を等位接続する場合、テ形による等位接続が許されないことを例文(2)－(5)で見た。(26)に再掲する。

- (26) a. *花子はごぼうを薄くて、細く切った
b. *花子は歌を明るくて、楽しく歌った
c. *花子は口を真っ赤で、濃く塗った
d. *花子は歌を上手で、優雅に歌った

テ形を構築するテそれ自体が単なる接続形式なら、(26a)－(26d)は適格になるはずである。2節と3節で形容詞・形容動詞のテ形が定形の等位接続構造に現れることを主張した。結果構文、様態構文は(27)に示すように「一く」「一に」という形態を要求する。

- (27) a. 花子はごぼうを薄く切った
b. 花子は歌を明るく歌った
c. 花子は口を真っ赤に塗った
d. 花子は歌を上手に歌った

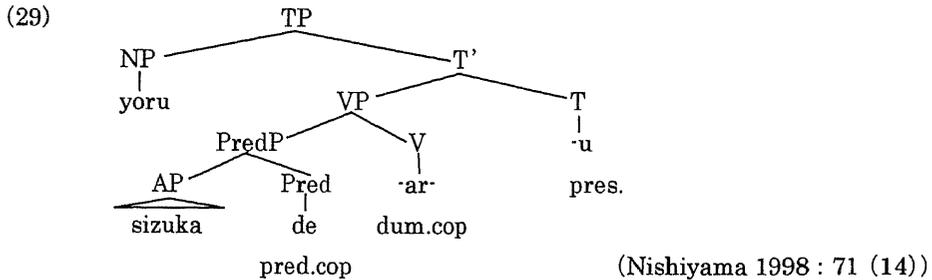
3節で形容詞・形容動詞の形態「一く」「一に」が現れる環境は、非定形の構造であることを見た。動作の様態や結果状態を表す形容詞・形容動詞を等位接続した場合、(28)のように非定形の形態を伴う等位接続は適格である。

- (28) a. 花子はごぼうを薄く、細く切った
b. 花子は歌を明るく、楽しく歌った
c. 花子は口を真っ赤に、濃く塗った
d. 花子は歌を上手に、優雅に歌った

2節と3節の考察および(28)から、(26)のテ形による等位接続が許されないのは、形容詞・形容動詞の形態「一くて」「一で」が定形節に現れる等位接続形式であるためだと説明できる。テ形を構築するテそれ自体は、単なる接続形式ではないといえる。

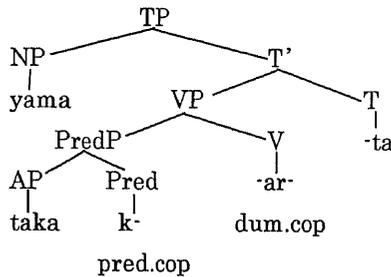
5. 形容詞・形容動詞のテ形と統語構造との相関

Nishiyama (1998, 1999a) は形容詞・形容動詞に統語的な差異はなく、その違いは統語構造決定後の形態構造に現れると主張する (cf. Baker (2003)). 例えば形容動詞「夜が静かだ」の場合、「-だ」は「-である」の縮約形であり、その構造は (29) になる。

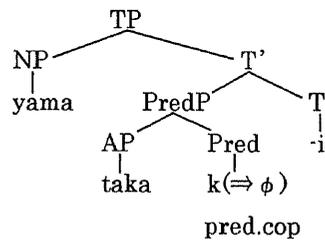


形容詞「山が高い」の場合、過去時制と非過去時制でその構造が異なっている。過去時制「高かった」は (30a) のように dummy copula を要求するため、「静かである」と同じ構造になる。非過去時制「高い」の場合、(30b) のように dummy copula を要求しない³。

(30) a. 過去時制：山が高かった



b. 非過去時制：山が高い



(Nishiyama 1998 : 75-76 (23) (24'))

形容動詞と形容詞の形態構造の違いをまとめると次のようになる。形容動詞「静かだ」の基本形は「静かである」で、「静かで」が PredP を構築する。形容詞「高い」の PredP を構築するのは「高+k」で、形容詞語幹+k の形をとる。PredP の形態の違いが形容詞、形容動詞の違いになる。形容詞、形容動詞の違いは PredP の形態にあるだけで、統語的には同じ範疇であり、その統語構造も (29) (30) に示すように同じである。

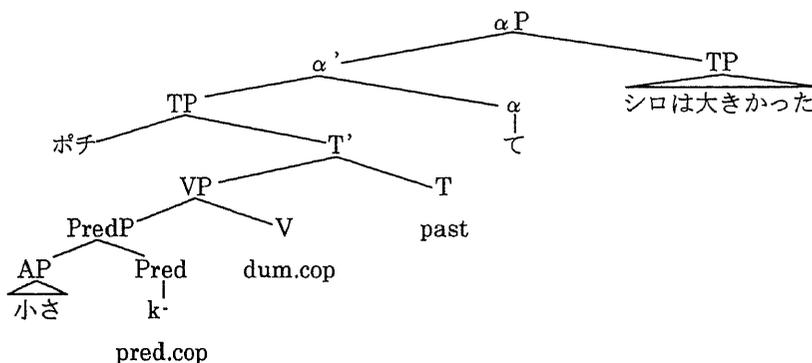
さて、2 節と 3 節で、形容詞・形容動詞のテ形は時制辞を伴う等位接続形式だと述べたが、これらの結果と形容詞・形容動詞の統語構造との相関を捉えると (31) になる。形容詞・

³ 「高くもある」「商品は安くあるべきだ」のように、非過去時制も過去時制と同様に dummy copula 'ar-' が仮定できると Nishiyama (1998, 1999a) は指摘している。非過去時制「高い」に dummy copula を仮定するか議論はあるだろう。しかし、ここでは Nishiyama (1998, 1999a) が示す (30b) の構造に従って考察を進めることにする。

い。「でて」が現れないのは、①「で+て」という音形に近いものに対して何らかの音韻的制約が働いている（重音省略：haplology）、②「で」は音声化されない等位接続形式と形態融合する、③(29)の構造を若干修正する。pred.cop+dum.cop+tense+ α という統語構造が構築されると、形容動詞の場合「で」が指定される、④古語では[利口に+dum.cop+tense+て→利口にて]だったが、現代語では「利口にて」の「にて」が縮約されて「利口で」になった、という4つの可能性が考えられる。④の場合、現代語の「利口であるべきだ」という基本形があるため、古語と現代語とは切り離して考えるべきだろう。①～④のうち、どれが最適なのかという問題は今後の課題にするが、形容動詞に「一で」が現れるのは(32)のような統語構造が構築され、音韻的調整が行われた結果である。

(33)は形容詞のテ形節の統語構造である。(32)の形容動詞の場合と同様、拘束テンス構造をとらないため、統語構造ではdummy copulaと過去時制が構築されることを示さなくてはならない。しかし、'ar'と'ta'は音聲的に具現化されない。形容詞の場合、PredPの主要部は/k/である。日本語の音節構造上の制約により、母音が挿入されて「一く」になる（語中音添加：epenthesis）⁵。

(33) ポチは小さくて、シロは大きかった



時制辞を含む接続形式テとの形態融合により「一くて」が派生する。形容動詞の場合と同じく、統語構造が決定した後に形態「一くて」が現れる。

6. おわりに

本稿における考察と結論をまとめると以下ようになる。

2節では①過去時制の文でも非過去時制の文でも等位接続した場合テ形になり、テ形節と後節にそれぞれ異なる時制の文も生起できること、②空所化に厳密同一性条件が関与する

dummy copula と時制は統語構造で構築され、形態構造や音韻として出力される時は PredP と等位接続形式とが直接融合すると仮定するのは、理論的に問題ないだろう。

⁵ 日本語の挿入母音については、Nishiyama (1998, 1999a, 1999b) を参照されたい。

こと、③テ形節を絶対時制として解釈すること、④テ形節と後節にそれぞれ異なる主格主語が生起できることから、一次述部に現れる形容詞・形容動詞のテ形が後節と TP 位置でそれぞれ独立した定形の等位接続構造を構築することを明らかにした。

3 節では、動詞「する」が要求する補文述部の時制によってその主語の格が決まることを根拠に、動詞「する」の補文述部を等位接続し、その適格性の判断から形容詞・形容動詞のテ形が時制辞を含む定形の等位接続形式であることを確認した。

以上の考察から、動作の様態または結果状態を表す形容詞・形容動詞を等位接続した時にテ形が生起できないのは、様態構文・結果構文では非定形の構造が要求されるのに対し、形容詞・形容動詞の形態「-くて」「-で」が時制辞を含む定形の等位接続形式であるためだと述べた。

5 節では Nishiyama (1998, 1999a) をもとに形容詞・形容動詞のテ形と統語構造との相関を提示し、「-くて」「-で」がどのような統語構造から具現化されるかを提示した。

吉永 (1995) は、形容詞・形容動詞の形態「-くて」「-で」が並列用法だけでなく、原因・理由用法に現れること、形容詞の形態「-く」も並列用法と原因・理由用法に現れることを言及している。先行研究における意味・用法分類の問題、形容詞の形態「-く」について、紙面の都合上、考察できなかった。この問題は別稿で論じることにした。

【参考文献】

- 奥田靖雄 (1989) 「なかどめー動詞の第二なかどめのばあいー」言語学研究会 (編)『ことばの科学』2: 11-47. 東京: むぎ書房.
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 柏谷嘉弘 (1973) 「『形容動詞』の成立と展開」鈴木一彦・林巨樹 (編)『品詞別日本文法講座 4: 形容詞・形容動詞』95-162. 東京: 明治書院.
- 加藤陽子 (1995) 「テ形節分類の一試案: 従属度を基準として」『日本語教育論集 世界の日本語教育』5: 209-224.
- 佐藤直人 (1996) 「『テ』で導かれる句の構造的な大きさと時称的解釈」『新潟大学国語国文学会誌』38: 17-38.
- 竹沢幸一 (1998) 「格の役割と構造」中右実 (編)『格と語順と統語構造』9, 日英語比較選書. 1-102. 東京: 研究社.
- 塚原鉄雄 (1970) 「形容動詞と体言および副詞」『月刊文法』19: 40-46.
- 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』東京: くろしお出版.
- 時枝誠記 (1950)『日本文法 口語篇』岩波全書 114. 東京: 岩波書店.
- 新川忠 (1990) 「なかどめー動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のばあいー」言語学研究会 (編)『ことばの科学』4: 159-171. 東京: むぎ書房.
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」仁田義雄 (編)『複文の研究』上: 87-126. 東京: くろしお出版.

- 橋本進吉 (1935) 「國語の形容動詞について」藤岡博士功績記念會 (編) 『藤岡博士功績記念 言語學論文集』 389-421. 東京: 岩波書店.
- 三尾砂 (1942) 『話言葉の文法 言葉遺篇』 東京: 帝国教育会出版部.
- 三上章 (1955) 『現代語法新説』 東京: 刀江書院.
- 水谷静夫 (1951) 「形容動詞辨」『國語と國文學』 28-5: 31-47.
- (1952) 「形容動詞と謂ふもの」『國文學 解釋と鑑賞』 199: 37-42.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 東京: 大修館書店.
- 三原健一 (1997) 「連用形の時制指定について」『日本語科学』 1: 25-36.
- 山崎良幸 (1958) 『現代語の文法』 東京: 武蔵野書院.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 東京: 宝文館.
- 吉澤義則 (1932) 「所謂形容動詞に就いて」『國語・國文』 2-1: 1-37.
- 吉永尚 (1995) 「なかどめ形節分類についての考察」『日本語・日本文化研究』 5: 93-106.
- 吉永尚 (1997) 「付帯状況を表すテ形動詞と意味分類」『日本語教育』 95: 73-84.
- Baker, Mark C. (2003) *Lexical Categories ; Verbs, Nouns, and Adjectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) Distributed Morphology and the Pieces of Inflection. In: Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, 111-176. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kageyama, Taro (1982) Word Formation in Japanese. *Lingua* 57: 215-258.
- Miyagawa, Shigeru (1987) Lexical Categories in Japanese. *Lingua* 73: 29-51.
- Namai, Kenichi (2002) The Word Status of Japanese Adjectives. *Linguistic Inquiry* 33: 340-349.
- Nishiyama, Kunio (1998) The Morphosyntax and Morphophonology of Japanese Predicates. Doctoral dissertation, Cornell University.
- (1999a) Adjectives and the Copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 183-222.
- (1999b) Two Levelings in Japanese Verbal Conjugation. 『コミュニケーション学科論集第6号: 茨城大学人文学部紀要』 23-49.
- (2005) Morphological Boundaries of Japanese Adjectives: Reply to Namai. *Linguistic Inquiry* 36: 134-143.
- Ross, John Robert (1967) Constraints on Variables in Syntax. Doctoral dissertation, MIT. [Published 1986 *Infinite Syntax!* Norwood, N.J.: Ablex Publishing Corporation.]
- Takezawa, Koichi (1987) A Configuration Approach to Case-Marking in Japanese. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Uehara, Satoshi (1998) *Syntactic Categories in Japanese: A Cognitive and Typological Introduction*. Studies in Japanese Linguistics 9. Tokyo: Kuroshio Publishers.